

## 相談室

佐藤光子

岡山県・42歳・主婦

中庭の掃除をしているとき、あなたは突然声をかけてきた。声に振り向くと、小部屋の窓から顔を出して、笑っているあなたがいた。

「こんなに暑いのに、まじめに草取りしてるなんて、すごいな」

中等部の私からは、とても大人っぽく見えた高等部のあなたと、その時初めて話したよね。

「そんなところで何しているの」

尋ねる私にあなたは答えた。

「先生と、ちょっと、お・は・な・し」

その部屋が『相談室』っていう名前で、先生のお説教を聴く部屋だなんて、私はそれまで知らなかった。それから、校舎の中や通学路で出会うたび、私はいつもあなたに言った。「今日は相談室には行かないの」

あなたはちょっと苦笑して、

「子供には関係ないの」

っていつも言ってた。

夏休みも終わりのある朝、父さんが新聞を広げ突然言った。

「おまえの学校の生徒が、オートバイの事故で亡くなったって記事が出てるぞ」

そんな、まさか、あなただなんて。名前を見ても信じられなかった。友達に電話して、本当だよって言われても、全然実感湧かなかつたよ。夏休みが終わったら、またいつもみたいに、あなたの笑顔に会える気がした。

だけど、あなたはいなかった。

ずっとあとになって、あなたが亡くなった、あのつづら折りのハイウェイに行ったよ。眼下の瀬戸内海が、とっても美しいこの曲がり角から、あなたは天に翔けていったんだね。友達がタバコに火をつけて、あなたになって、そっと置いた。タバコが好きだったなんて、ホントに不良ね。やっぱり相談室にいかなくっちゃ。

だけど私、まだ伝えてないよ。あれからずっと言えずにいるよ。あなたの笑顔が大好きだったって。どうして黙って逝っちゃったの。